

テモテへの手紙第一1章1-2節 「真実な我が子テモテ」

目的:「ゆだねられたものを守る」3:14-15,6:20

1A 使徒と命令されたパウロ

1B 救い主なる神

1C 救いのご計画

2C 神とキリストの一体性

3C ローマ宗教への対抗

2B 希望なるキリスト・イエス

1C 信仰の戦い

2C 神の現われ

2A 真実な我が子テモテ

1B 信仰による子

1C 母親からの聖書教育

2C パウロによる伝道、弟子化

3B 同労者

1C 宣教におけるパウロの代理

2C 手紙の書き手

3C 最後まで共にいた人

4B 恵み、憐れみ、平和

本文

まず本文を読みます。今日は二節です。「1 私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから、2 信仰による真実の我が子テモテへ。父なる神と私たちの主なるキリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とがありますように。」

目的:「ゆだねられたものを守る」3:14-15,6:20

私たちは、新しくテモテへの手紙第一を学んでいきます。テモテへの手紙は新約聖書に二つあり、そしてテスへの手紙がその後にあります。この三つを「牧会書簡」と呼びます。他の手紙は、教会に対して使徒が書いた手紙であるのに対して、牧者であるテモテやテスに個人的に書いた手紙だからです。ですから、多くの人々に対して書かれた手紙に比べると、とても個人的で、教会に事柄に関する内容になっています。

今、恵比寿バイブルスタディでは、ピリピ人への手紙を通して、教会とは何であるか、その深い部分を学んでいます。そして、そのピリピ人への手紙の書き手は誰かと言いますと、1章1節に「キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから」となっているのです。私たちはとにかく、これだ

け広範囲の宣教旅行を行なってきたパウロを見て、彼独りの活躍であるかのように考えてしまいます。しかし、使徒行伝を見ても、またパウロの手紙を見ても、彼はその多くが「私たち」という言葉を使っていて、彼独りの務めや働きではないことを思い出さないとはいけません。テモテの言葉というのが、聖書に見当たらないようで、実は、「パウロとテモテ」と言っているように、彼も多くの手紙を書いていた。キリストにある同じ思いをしっかりと持っていたからこそ、パウロはテモテをその横に名前を入れていました。

ですから、その一対になってやっていた宣教の働きの中で、その一対の中の会話を私たちはこの手紙で読むこととなります。ですから、とても深いです。ちょうど夫婦が一対になってあることを行なっていて、いつもは外に向けた言葉だけを聞いていたけれども、今はその夫婦の会話を聞くということになります。

具体的な背景としては、時は、ピリピ人への手紙の後のことです。ピリピ人への手紙では、彼はローマの牢獄に入っていました。けれども、1章25節で「私が生きながらえて、あなたがたすべてといっしょになることを知っています。」と言っているように、彼は釈放される可能性も予期していたようです。事実、彼は釈放されたようです。その後、彼はエペソに行ったようです。そこでテモテをその教会に置き、そこで牧会をするように命じて、それからマケドニアに行きました。つまりピリピやテサロニケ、ベレヤなどがある地域です。パウロはテモテに、「1テモテ 1:3 私がマケドニアに出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっていて、」と言いました。

けれども、エペソに行くのがどうも遅くなりそうだったのです。3章14-15節にこう書いてあります。「私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いつつも、この手紙を書いています。それは、たとえ私がおそくなったばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。」この手紙には、教会で起こっている問題や課題について、どのように対処すればよいか、その具体的な指針と指示をパウロがテモテに与えています。彼本人が言って、テモテに指示すればよかったのですが、それが間に合わないかもしれないので、こうやって手紙に書いています。

いろいろな問題が起こっている時に、何が大事なのか？それは、「大事なことを大事にする。」ということです。いろいろなことが起こっても、私たちが教会を牧しているのは、これこれが理由なのだ、という大事なことを思い出すことです。それをパウロはここで、「神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。」と言っています。人の集まりではなく、ここは家であり、家族である。そして概念や知識を信じているのではなく、生ける神を信じている。そして、生ける神は、真理の柱と土台をもってその家が建てられているということです。そして、キリストが肉体を取って現れ、御霊によって証言されて、天に引き上げられたという真理を話しています。とどのつまり、このことを信じているのだよ、そしてこのことを前面に出して行くのだよと教えています。

私たちが、教会としてこのことを忘れないようにしないといけませんね。何のために教会をしているのか？この福音のためです。キリストが私たち罪人を救うためにこの世に来られたということを宣べ伝えるため、証言するため、そのために生きていくためです。これさえしていれば、教会の目的を達成しています。路傍伝道をしている時に私はそんなことをふと考えます。

そして当時のキリスト教社会のことを考えてみましょう。時はローマ、キリスト教会が建てられても、教会堂というものは建てたくてもできませんでした。非合法であり、迫害の対象だったからです。そして、もちろん神学校のような学校制度もありません。ですから、それぞれの家で礼拝を守っていました。ですから自ずと、牧者の数は多くいたことでしょう。家々を巡回していた人々も多かったと思います。そして、彼らがどのように人々を働き人に整えたかと言えば、しっかりと教え、戒め、勧め、まさに私たちがこのようにして学びを持つことによって、訓練を受けていきました。

そして、エペソは、主の驚くべき御業が起こったところです。パウロはそこで二年間、福音を伝えていたので、エペソは貿易中継都市だったため、「アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。(使徒 19:10)」とまでなりました。パウロは、ローマで幽閉される前、エルサレムに向かう旅をしていたわけですが、その道でかつて滞在したエペソの近くまで行きました。そしてエペソにいる長老たち、すなわち牧者たちを集めたのです。そして驚くべきことを言いました。「使徒 20:28-30 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」

つまり、偽りの教えをする者たちがどんどん入り込むということです。一個の教会や数個の教会ではありませんでした。数多くの家の教会、そして数多くの牧者たちがいましたが、それゆえ偽りの教えが入ってくるということは容易だったのです。だから、気を配りなさいと言っています。けれども、もっと心が痛むのはその牧者たちの中から、なんと曲がったことを語って、弟子たちを自分たちのほうに引きこもうとするということです。

それで、ずっと後にパウロはテモテにこの手紙を書いています。果たしてエペソはこうした偽りの教えがかなり入っていました。それでテモテが任命を受けた時、彼はその教えに対抗しなければいけません。3 節以降、偽りの教えにどう対処するのかしっかりと教え、それが手紙全体に、実に第二の手紙にも書いてあり、テトスの手紙にも同じようなことが書かれています。けれども、テモテは元々、おとなしい性格の人でした。しかも、まだ若かったのです。それで、周囲の人々に押されて、尊敬されず、腹を痛めるほどでした。そこでパウロは、「祈られた時に預言で与えられた、聖霊の賜物を奮い立たせなさい。」と鼓舞して、テモテがしっかりと神に与えられた任務を果たすように命じているのです。

そして、パウロがエペソにやってくるまでに、しっかりと踏ん張っていなさいと励ましました。手紙の最後でこう言っています。「テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。(6:20)」私たちは、神から福音を、真理をゆだねられています。またキリスト者としての生き方、それがゆだねられています。主が戻って来られるまで、しっかりと守っていなさい、それを純粋に保っていないという教えです。

1A 使徒と命令されたパウロ

それではもう一度1節を見てください。「1 私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエスの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから」とあります。「使徒」パウロから、と言っています。ピリピ人への手紙では、単なる「しもべ」として自分を紹介していましたが、使徒職を持ってきて偽りの教えに対抗しなければならないという状況がありました。パウロの宣べ伝える福音とは反する、律法主義の一種、その逸脱した教えを広めていたので、そうではないことをはっきりさせなければいけません。そしてテモテが、自信をもって、自分の伝えている教えが、神からのものであることを伝えることができるのです。

パウロは、ここで、いつもなら「神のみこころによって、使徒とされた」とか「神に召された」という言葉を手紙の冒頭に書きます。しかし、ここでは上司、いや軍隊における上官からの命令であるがごとく、「神とキリスト・イエスの命令によって」使徒となったと言っています。そうです、パウロはテモテに、兵役に付く者として、自分のことを掛かり合わない者として、こうしなさいと命令しています。自分を捨てた者としての姿です。「キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみを共にしてください。(2テモテ 2:3)」と第二の手紙で言いました。けれども、それはパウロ自身が、キリスト・イエスという最高司令官の至上命令を受けているからです。神の国の働き人は、このように自分を捨てていく時に用いられます。

1B 救い主なる神

1C 救いのご計画

その命令しておられる方が、初めに「私たちの救い主なる神」と言っています。普通、父なる神がおられて、救い主なるイエス・キリストと書きますが、ここでは「救い主なる神」と父なる神が救い主として書いています。確かに、神が私たちを救われる方、これこそが神の目的の中で筆頭であるということです。そしてそのご計画を御子キリスト・イエスにおいて実行されました。

4-5 節において、なぜパウロがこのことを強調したかを窺い知ることができます。「果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。」いろいろな論議が教会の中に入り込んでいました。しかし、それが教会の目的ではありません。先に読んだように、教会は、生ける神の家であり、それは真理の土台と柱の家です。その真理とは、神の救いのご計画です。これから、何とかして注意を逸らしていこうとする圧力がとてつもなく、テモテにかけられていたのです。

つまり、私たちの神は、論理の中で迷宮入りさせるような方ではありません。その知識によって高ぶらせるような方ではありません。神は我々罪人を救われる方なのです。このことは、真理の柱であり土台なのです。

2C 神とキリストの一体性

そして、父なる神を救い主ということは、イエス・キリストも父なる神と同等であり、一つにされていることを表しています。イエスが救い主であられる、けれども神が救い主であられる、だからイエスは神と切り離せる存在ではない、イエスご自身が神であり、父なる神と一つであることを示しています。テトスへの手紙では、はっきりとイエス様が神であることを宣言している箇所があります。「テトス 2:13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。」

3C ローマ宗教への対抗

そしてもう一つ、当時のローマ社会への対抗があります。ローマにおいて、「救い主」という呼び名はローマ皇帝に使われていたものでした。皇帝が全世界に平和をもたらしたことによって、あなたがたを自由にしたのだ、あなたを救ったのだと言っていたわけです。「カイサルが救い主」と強制的に言わされていたという背景がありますが、それを、「キリスト・イエスが救い主である」と明確に信仰告白したのです。イエスが救い主なのです。私たちは生活の至るところに、「これをやればあなたの生活は救われる、あなたの生活は安定し、安寧を得られる。」という要素があります。しかし、私たちはこれを拒みます。イエスの名にこそ、私を救う力があるとして、日々の生活の中でもその救いの力を体験するのです。

2B 希望なるキリスト・イエス

1C 信仰の戦い

そして、「私たちの望みなるキリスト・イエス」と言っています。これは、テモテにとても必要な言葉でした。周囲の状況を見れば、望み薄だったからです。このことは、主の働きをしていると、いろいろな場面で遭遇します。目で見えるところでは、失望させられてしまうことが多々あるのです。それで、私たちは素直に、純粹にイエス様を信じて、この中に留まって生きていこうという意欲をそがれてしまうのです。パウロは、二度目にローマで牢屋に入れられました。今度はついに殉教します。その直前に書いたのが第二の手紙ですが、「私が主の囚人であることを恥じてはいけません。(1:8)」と言いました。そのままイエス様を信じる生活をしようとすると、失望するようなことが来て、その信仰告白をするのを恥じるようになります。これは羞恥心というよりも、がっかり感ですね。

しかし、そこで希望がどこにあるのかを思い出すのです。それはキリスト・イエスご自身にあるのだということです。信仰の創始者であり完成者であられるこの方から目を離さないということです。そこにこそ、私たちの希望があります。その希望は失望に終わることがありません。そこでパウロはテモテに、「信仰の戦いを勇敢に戦いなさい」と言いました。「6:12 信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告

白をしました。」私たちは主を信じれば、永遠のいのちを持ちます。そして、その永遠のいのちに至るには、その道程は戦いがあるのだといいます。それは信仰と希望の戦いです。この方から目を離さないで生きる戦いです。

2C 神の現われ

具体的には、私たちは主イエス・キリストの現れ、再臨を期待します。「6:14-16 私たちの主イエス・キリストの現われの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。その現われを、神はご自分の良しとする時に示してくださいませ。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のもので。アーメン。」王の王であられる方が戻って来られます。この方からの命令で、パウロは福音をゆだねられました。したがって、私たちがこの地上で証しを立てるといことは、この世全体に対して、証しを立てているということになります。どんな人に対しても、社会に対しても、国に対しても、そして世界に対して証しを立てているのです。

2A 真実なわが子テモテ

1B 信仰による子

それでは2節を見ましょう。初めに「信仰による真実のわが子テモテへ。」とあります。

1C 母親からの聖書教育

なぜパウロが、テモテのことを血縁関係のない人なのに、「真実の我が子」とまで呼んだのか、それを知っていきたいと思います。テモテが初めて出てくるのは、使徒の働き 16 章です。彼の第二宣教旅行が始まりました。パウロはシラスと共に小アジアを巡っていましたが、ルステラに行きます。こう書いています。「16:1-3 それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシヤ人を父としていたが、ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった。パウロは、このテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前、彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることを、みなが知っていたからである。」

興味深い家庭環境です。父はギリシヤ人ですから異邦人です。けれども母がユダヤ人です。今のユダヤ教では母がユダヤ人であれば子供はユダヤ人という定義ですが、聖書的に、また当時のユダヤ教では父がユダヤ人であればその子もユダヤ人ということでした。したがって、テモテは異邦人とみなされており、それゆえ割礼も受けていませんでした。それでパウロは、ユダヤ人に宣教する時に、そのことがかえって宣教の妨げになることのないように、彼に割礼を受けさせました。

2C パウロによる伝道、弟子化

そして、母のほうは信仰を持っていると言っていますが、ということは、父は信仰を持っていなかったのではないかと思われます。母また彼自身がどのように信仰を持ったかについては、使徒の

働き 14 章でパウロがルステラに来ていることが記されています。パウロの第一次福音宣教において、この二人が福音を信じたのではないかと思われます。しかし、ユダヤ人としてしっかりと聖書を読んでおり、実に祖母からイスラエルの希望についてその信仰を持っていたようです。テモテへの手紙第二を読むと、テモテは幼少のころから聖書に親しんでいたことが分かります(1:5,3:15)。そして、彼はパウロの宣べ伝える福音で、イエスこそがキリストであるという確証を得たのではないかと思います。そしてテモテは、それ以降、パウロと共にいて彼から神の教えを受けていました。

3B 同労者

1C 宣教におけるパウロの代理

そしてテモテは、パウロの行けないところに遣わされたり、またパウロが行った後にそこに留まったりしています。今、学んでいる最も身近な、ピリピ人への手紙において、まさにその一例です。「2:19-24 しかし、私もあなたがたのことを知って励ましを受けたいので、早くテモテをあなたがたのところに送りたいと、主イエスにあって望んでいます。テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもないからです。だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。しかし、テモテのりっぱな働きぶりは、あなたがたの知っているところですよ。子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕して来ました。ですから、私のことがどうなるかがわかりしだい、彼を遣わしたいと望んでいます。しかし私自身も近いうちに行けることと、主にあって確信しています。」今、私たちが学んでいる「思いを一つにする」ということ、これをできていた模範はテモテでした。ゆえに、パウロが直接行く前、テモテを遣わせば、彼の伝えようとしている真理を変わりなく伝えることができたのです。

2C 手紙の書き手

そして、先ほど話しましたように、パウロはテモテも入れて共著にして手紙をいくつか書いています。ピリピ書の冒頭がそうでしたが、その他、テサロニケ第一、コロサイ書も同じです。これは大事ですね。パウロの使徒的働きとは全然性質が違いますが、それでも宣教の働きというのは、こうやって広がっていきます。カルバリーチャペルでは、それを最近では DNA と呼びます。今は全米で確か二千ぐらいの数があり、世界中にも広まっています。そこでは、それぞれの人が個性をもって、個性ある教会作りをしています。けれども、どこにいても同じなのです。それはコンビニのようなフランチャイズではありません。そうではなく、それぞれが自発的に、主体的に考え、祈って神から与えられているものを行っているのですが、どうしても同じことをやはり考えてしまっています。時々、同じような日に、同じような時間に、他のカルバリーの牧者と全く同じようなことを考えている時もあるぐらいです。今、カルバリーチャペルと言いましたが、福音を信じる教会でも同じことを感じるでしょう。

今、クリスチヤンの生活と証しコースを取られている兄弟姉妹がいますが、他の教会の兄弟姉妹と触れて、またそこでの教えに触れて、皆がその内容に納得しています。ですから、このようにして信仰が受け継がれているのです。パウロがテモテと共著にしても、ずれることないほどの、その霊的遺産がすでに受け継がれていました。

3C 最後まで共にいた人

そしてテモテは、最後までパウロと一緒にいた人でした。奉仕の務めにおいて、次から言うことはとても厳しい現実です。その信仰の戦いをしている中で、共に働いていた人々もこの世を愛して離れていくということがあるのです。既にピリピ書には、パウロのことを気にしているのはテモテで、その周りの教会の人たちでやって来た人たちがいなかったと言います。そして、パウロが死刑にされる直前に書いたテモテ第二の手紙を読みますと、小アジアにある教会出身の働き人は全て離れてしまった、と書いてあります。さらに、彼は名前を挙げて、この人はいなくなりました、あの人もいなくなりました、と言っています。「2テモテ 4:9-11 あなたは、何とかして、早く私のところに来てください。デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまう、また、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマテヤに行ったからです。ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。」その中で、ルカやテモテなどは最後までパウロと一緒にいた人でした。

このような背景が全てあって、テモテのことを「信仰による真実な我が子」だと言っています。私がかつて、イエス様から信仰による真実な我が子と言われることができるのか、と思いますと、もっとも捨てなければいけないものがあるなと思います。そして、イエス様だけでなく、イエス様に従ってきた霊的な指導者に対しても、確かに信仰による真実な我が子と言ってもらえるのかと考えさせられます。

4B 恵み、憐れみ、平和

そして最後の部分、「父なる神と私たちの主なるキリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とがありますように。」とあります。これも、他の手紙と同じ挨拶です。恵みはギリシヤ人の挨拶言葉、平安はユダヤ人の挨拶言葉です。それを合わせているところに、二つが一つになったことを示しますし、また神の恵みがあって、初めて神の平安があることが分かります。その反対にはなりません、私たちは神の平安を得ようとして、自分で獲得しようとしても、私たちが何か行なったからと言って得られるものではありません。神がおられるのだ、神がしてくださっているのだ、しかも私たちがどうであろうと関係なく、神が恵み深いからそうしてくださるのだ、ところに立てば、私たちに平安が与えられます。

けれども、牧会書簡で特徴的なのは「憐れみ」という言葉がその真ん中に入っていることです。福音の働き人にとって、これをもっとも必要としていることでしょう。自分とはとても罪人だ、神の憐れみなしには私は到底、生きていけない。そういう感覚です。パウロもそのことを話しました。「1テモテ 1:15「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」神の深いあわれみが、主の奉仕者を奉仕者として立たせてくれる源泉があります。